

---

# 代名詞 *tou* の用法： Bantik 語における情報構造標示の一例

内海 敦子\*

## 概 要

本論文はインドネシア北スラウェシ州で話されている Bantik 語における情報構造標示に用いられる *tou* の用法について例示し記述するものである。*tou* は新しく文脈に導入された名詞句に付加される要素だが、その名詞句はその後の文脈でも重要な役割を果たすことが期待されることを示す。以下では *tou* が付加した名詞句が、導入された後にどのような役割を果たし、どれだけの顕著さを持つかを検証する。

## 1. 概論

本論では、Bantik 語における名詞句が、その情報の新旧 (givenness) によってどのような標示を受けるかを Gundel et al 1993, Gundel 2003 を参考に整理し、その中で *tou* という要素がどのような givenness を標示するかを示す。その後、*tou* が付加した名詞句がそれが登場した後の文脈においてどのような顕著さ (saliency) を持っているかを考察する。このセクションでは、Bantik 語についての基本的な情報と、本論において用いたデータについての情報について述べる。

### 1.1 Bantik 語について

Bantik 語はオーストロネシア諸語の一つで、West-Malayo Polynesian 諸語、Philippine 諸語に属し、さらに周辺の五つの言語を含む Sangiric subgroup の一つとされる (cf. Noorduyn (1991), Sneddon (1984) 他)。インドネシア国、北スラウェシ州マナド市近郊で話されており、話者は 1991 年当時一万人と推定されていた (cf. Noorduyn (1991))。しかし、内海 (2008) などの観察によると、全ての Bantik 語話者はインドネシア語マナド方言とのバイリンガル話者である。総じて 1960 年代以降に生まれた話者にはマナド方言を第一言語とし、Bantik 語を第二言語とする話者が多く、1980 年代以降に生まれた世代は非常に限られた Bantik 語しか解さない。消滅の危機にある言語の一つと言える。

Bantik 語には五つの母音 /i, e, a, o, u/ と十四の子音 /p, b, t, d, k, g, s, h, ʔ, j, r, m, n, ŋ/ を持つ。子音のうち、声門閉鎖音は稀な例外<sup>1)</sup>を除き、base 末にしか来ない。

形態論の概略を述べると、base だけで形成される語もあるが、多くの語は base に一つ以上の接辞が付加して形成される。名詞と形容詞には base だけで形成される語も存在するが、

---

\* 日本文化学科 准教授 言語学

動詞はほとんどの場合 base に接辞が付いた形でしか現れることができない。そのほか、reduplication も生産的に機能する<sup>2)</sup>。

動詞はフィリピン諸語の典型的な性質を示し、Actor Voice に加え、Undergoer Voice が二つ存在し、本論文ではこれらを Goal Voice と Conveyance Voice と呼ぶ (cf. Bawole (1993) and Utsumi (2005))。

基本的な語順は SV (ないし Agent-Verb) と SVO (ないし Agent-Verb-Patient) である。動詞が Actor Voice を取るときには、これらの語順が多く用いられるが、Undergoer Voice のときはそうではない。VS+Agent (ないし Verb-Patient-Agent) の語順を取ることが、テキストによって異なるが、50% 前後ある。自動詞文のときにも VS の語順をとることは特に会話においてはよくみられる。

他動詞の Actor Voice の文においても、新しく導入された名詞句が節の主語として機能するときは、VS (動詞が自動詞のとき) あるいは VSO (Verb+Agent+Patient) の語順になることが、特に会話においては、良く見受けられる。新情報が節の後方に来ることは通言語的に普遍的に観察できる現象 (Clark & Clark 1977, Clark & Harviland 1977 他) であり、Bantik 語においてもその現象が見られるのである。

## 1.2 本論で扱うデータ

本論で引用した例文は、筆者が1996年以降の調査で得た作例と筆者が2007年から2013年にかけて採集した Bantik 語の民話、独白、会話から抜き出したものである。作例については例文の末尾に Elicitation session と示した。

テキストとした民話は '*I-timpunu bo i-boheng* 「亀と猿」、'*Kokokuk* 「ココクック (鳥の一種の名前)」、'*Batu Karang* 「カラン石」である。最初の民話は知っているものを自然に語ってもらった。話者は1940年代生まれの女性である。後の二つはインドネシア語の子供用の民話の本から Bantik 語に翻訳してもらったものである。翻訳してくれたのは1940年代生まれの男性二人である。インドネシア語の影響を最小限にするため、翻訳してもらった後、時間をおいて Bantik 語のテキストだけを見てより自然な文章になるように訂正してもらった。独白は '*Waktu Kecil* 「子供時代」と '*Luka* 「古傷」と名付けたもので、それぞれ題名に関する事柄を自由に話してもらって録音したテキストである。会話は四人の話者が改築中の家の前で自由に話しているもので '*Memperbaiki Rumah* 「家の改築」と名を付けている。それぞれの例文の最後にどのテキストから取っているかを明示してある。1960年代生まれの女性が一人、1950年代生まれの男性が一人、1940年代生まれの男性が二人である。

## 2. Bantik 語の Referential givenness を表す要素

### 2.1 本論で扱う 'Referential givenness' について

本論では、Gundel et al 1993, Gundel 1999, Gundel 2003, Hedberg 2013 等で提唱されている Givenness Hierarchy の coding protocol を参考に Bantik 語において名詞句がどのような標示を持つかを整理する。

Gundel 1999 においては、givenness を 'Referential givenness' と 'Relational givenness' の

二種類に明確に分けて論じている。前者は「言語表現と、それに対応する話者・聞き手の頭の中、文脈、現実世界あるいは可能世界<sup>3)</sup>、に非言語的（概念的）要素を関連付ける」関係を表したものである<sup>4)</sup>。言い換えると、「言語要素」とそれが「指し示すもの」との関係である。「指し示すもの」が、直前に話題にのぼったか、すでに文脈の中で指示されているか、どのくらい顕著なのか、どのように導入されたのか、どのような存在物なのか、が関連するパラメータとなる。

これに対し、‘Relational givenness-newness’は、ある文を二つの相補的な X と Y という部分に分けた場合の X と Y の関係性を表したものである<sup>5)</sup>。X はその文が何について述べているかを表す部分で、topic, theme, ground, logical/psychological subject などと称されてきた。Y は X について述べた部分であり、the comment, rheme, focus, locial/psychological predicate などと称されてきた。X は Y に対しては既知 (given) の情報であり、Y において述べられている事から独立しておりそのスコープの範囲外である。Y は X に対しては新 (new) の情報で、X に関して述べる事柄である。‘Referential givenness’と異なり、‘Relational givenness’は「ある表現上の同じレベルにおける二つ要素の関係」であり、話者が推測する聞き手の知識あるいは注目対象とは独立した概念である。言い換えると、‘Relational givenness’は言語要素間の関係であり、‘Referential givenness’は言語要素と現実世界（あるいは可能世界、あるいは話者・聞き手の頭の中）にある要素との関係について言及したものである。

本論では‘Relational givenness’に関しては取り扱わない。Bantik 語の名詞に付加する *you* が、どのような‘Referential givenness’を表すか、つまり言語要素と現実世界などにおける要素との関係を述べていく。

## 2.2 Bantik 語における名詞句の標示と名詞の認知的ステータス

Hedberg 2013 における Givenness の Coding Protocol は次の六つの information status について、それぞれの言語形式が存在しうるとされている。言語によっては、六つすべての形式を持つこともあるし、そのうちの三つしか持たないものもある。

まず、‘In focus’<sup>6)</sup>「焦点が当たっている」ことを示す形式は、会話の時点において焦点が当たっている事物と照応するように聞き手に指示する働きを持つ。‘In focus’は givenness hierarchy において一番顕著な information status を指す。

次が‘Activated’<sup>7)</sup>「活性化された」ことを示す形式である。これは短期記憶 (working memory) の中にある事物と照応するように、聞き手に指示する働きを持つ。

その次が‘Familiar’<sup>8)</sup>「良く知っている」なことを示す形式である。これは記憶にある事物と照応するように聞き手に指示する働きを持つ。‘Activated’よりも文脈的に速くにあるが、十分に記憶に新しい事物が‘Familiar’となる。

次に‘Uniquely identifiable’<sup>9)</sup>「特定できる」なことを示す形式が想定される。これは名詞句が理解される (processed) 時点で特定の事物と照応できることを示す形式である。

次の‘Referential’<sup>10)</sup>「(すでに) 述べられている」を示す形式は、名詞句が提示された時点ではそれが何を指示しているかが特定できなくても、文が理解される (processed) 時点で特定の事物と照応できることを聞き手に示す。

最後に、‘Type identifiable<sup>11)</sup>」「どのような要素なのか特定できる」ことを示す形式はどのような種類の事物であるかが特定できることを聞き手に示す。例えば「熊」という名詞単独では‘type identifiable’であり、聞き手は生物のうち、哺乳類の動物の一種であることが理解できる。

情報のステータスを表す言語要素は一つ以上の givenness のカテゴリーに当てはまるものがある。その場合は、Hedberg 2013にあるように、その中で一番下のカテゴリーに属するものとして整理したのが以下の(1)の表である。

(1) Bantik 語の名詞にかかわる形式と Givenness Hierarchy

<b>in</b>		<b>uniquely type</b>			
<b>focus</b> >	<b>activated</b> >	<b>familiar</b> >	<b>identifiable</b> >	<b>referential</b> >	<b>identifiable</b>
∅	<i>ie</i> ‘proximal’			<i>tou</i> NP	∅NP
pronouns		<i>ene</i> ‘medial’		<i>ite</i> ‘mirative proximal’	
(connective forms)	<i>e?e</i> ‘distal’			<i>ete</i> ‘mirative distal’	
		full pronouns			

次の2.3では、Bantik 語の名詞句の形式と Referential givenness との関係について簡単に説明し、第3節で *tou* が表す givenness について詳しく述べる。

2.3.1 ゼロ代名詞が表す ‘In Focus

Bantik 語において、‘in focus’の事物はゼロ代名詞か、代名詞の接続形が用いられる(ただし、ゼロ代名詞と代名詞接続形以外の形式により‘in focus’の事物が表されることもある。)

次の例(2)から(4)は、話者 Terok と Heis の一連の会話で、(2)と(3)は Terok が続けて発言したもの、(4)はその直後の Heis の発言である。連続して主題となっている *kite?* 「私たち(排他的一人称複数形)」は(3)と(4)の例文ではゼロ代名詞として現れている(例文中では∅でゼロ代名詞を示している)。

(2) *Terok: ma-ka-tahundu? kite? pona kokonio?=ken,*  
 Terok: AV.NPST-POT-remember I.1pl.EXC before small=CONT  
*ada baborou=te kite? ma-sa-soha-n m-ako m-paniki*  
 if evening=COMP I.1pl.EXC AV-RED-/a/-run-AN AV-go LK-Paniki.river  
 ‘(I) remember when we were small, in evening, we run together to go to Paniki river. (*Waktu Kecil*)’

(3) ∅ *ma-ka-dijih? sinage? η-kite? maŋ-ombara? ‘ako iki*  
 V.NPST-POT-listen friend LK-I.1pl.EXC AV.NPST-shout go let’s  
*yo ene kite? ma-nahioko?=te maya berenan=ne*  
 then that I.1pl.EXC V.NPST-quick=COMP all job=NL3sg

- |  |           |          |              |                 |           |               |          |
|--|-----------|----------|--------------|-----------------|-----------|---------------|----------|
|  | <i>ka</i> | <i>Ø</i> | <i>m-ako</i> | <i>m-paniki</i> | <i>su</i> | <i>paniki</i> | <i>e</i> |
|  | because   |          | V.NPST-go    | NU-Paniki.river | LOC       | Paniki.river  | DP       |
- 'Hearing our friend shouting 'Let's go', then we hurried (to finish) the work because (we are) going to the Paniki river. (*Waktu Kecil*)'
- (4) *Heis: Ø ma-idao?*                      *tansao su paniki Ø ma-mika raku?*  
 Heis: V.NPST-reach                      DIR.down LOC Paniki.river V.NPST-open clothes  
*bo ma-t-a-tumpere-an ma-idao? su m-iripi?*  
 and V.NPST-RED-/a/frog-AN V.NPST-reach LOC V.NPST-dive  
 '(When we) reached Paniki river down there, we took off clothes and we jump into (the river) together, even (we) dived. (*Waktu Kecil*)'

代名詞接続形が 'in focus' の事物を現している例は以下の (5) と (6) である。(5) では所有者、(6) では Undergoer Voice における「行為者」を表すのに三人称単数の接続形 =*ne* が用いられている。(5) の =*ne* は直前の節における *kayu* 「木」を指しており、(6) は主節の *buro* 「竹 (の一種)」を指している。いずれも直前で言及されているため 'in focus' の事物である。

- (5) *doŋka kayue ene nu ni-ruan-en yo o*  
 then wood that REL PST-buy-GV then INT  
*siŋ-apa ruan=**ne** siŋ-kubik*  
 single-what cost=NI.3sg single-cubic  
 'Then the wood is what you bought, wasn't it? (*Lit.* Then that wood was the one which was bought). How much was one cubic (of wood)? (Memperbaiki Rumah)'
- (6) *timpunu ie kute? n-ako=te nan-dea? buru*  
 turtle this DP AV.PST-go=COMP V.PST-find k.o.bamboo  
 [*ni-karimu?**ne** suda*]  
 NI-make=NI.3sg sharpened.pole  
 'The turtle is said to go away looking for bamboo which he made a sharpened pole from. (*I-Timpunu bo i-boheng*).'

### 2.3.2 代名詞独立形、指示代名詞で表される 'Activated' な事物

代名詞の独立形や指示代名詞は 'activated' な事物を現すことがある。以下の例 (7) は上記の (6) の直後に続く文であるが、*isie* 「三人称単数の代名詞独立形は例 (6) の *timpunu* を指しており、'activated' であると言える。

- (7) *isie na-ŋarimu?**te** suda su aruŋ nu-busa?*  
 I.3sg V.PST-make=COMP sharpened.pole LOC under LK-banana  
 'He made a sharpened bamboo, (put) under the banana (tree) (*I-timpunu bo i-boheng*).'

Bantik 語の指示代名詞には *ie* 「近称」、*ene* 「中称」、*e?e* 「遠称」の三つがあるが、このうち、*ene* は言語的・非言語的文脈にすでに出てきた事物を指し示す前方照応 (anaphora) の働きがあるが、*ie* と *en?e* に関しては基本的に会話が行われている場面 (非言語的文脈) において顕著なものを指し示す。次の例 (8) の二行目にある *ie* は、実際に発話場面に存在する家を指している。

- (8) Terok: *kumu na-muai na-?arimu? na?-apia*  
 2pl AV.PST-begin AV.PST-make AV.PST-good  
*pabanuan ie e, ka-?eden*  
 house this DP PST.Q-when  
 'When did you started to reform this house?'  
 Ela: *bucan pitu, bucan zuli, yo.*  
 month seven month July then  
 'Seventh month, in July, wasn't it?' (*Memperbaiki Rumah*)

### 2.3.3 指示代名詞で表される 'Familiar'

Bantik 語の指示代名詞は 'familiar' な名詞句に付加する。次の例 (9) は四人の話者による会話の一部であるが、Lei が発した一行目に出てきた *uasei* 「鉄」を受けて、最後の三行の Ela の発言の中で *ene* 「指示代名詞、中称」を付けた *uasei ene* 「その鉄」(最後から三行目)、*ene* 単独 (最後から二行目) が指し示している。このように *ene* が指し示すものは先行文脈において出てきたものであれば、直前に出てきてなくてもよい。

- (9) Lei: *ka rikudu?=ne poso?-an=te rahi uasei*  
 Lei: because back=NI.3sg put-GV=COMP too iron  
 'Because iron is also used for the kitchen.'  
 Ela: *ode*  
 Ela: yes  
 'Yes.'  
 Terok: *pa-?arimu?-an=ken <rimbalat> =ne*  
 Terok: APP-make-GV=CONT ceiling.board=NI.3sg  
 'The ceiling was reformed before (it).'  
 Ela: *∅ pa-idao?=te n-side rikudu?=ne to <besi> ene*  
 Ela: APP-reach=COMP LK-I.3pl back=NI.3sg DP iron that  
*ene kapasa-n=te n-side ma-idao? rikudu?=ne ene <kan>*  
 that stretch-GV=COMP LK=I.3pl V.NPST-reach back=NI.3sg that DP  
*suka nu ma-puro dua.*  
 size REL one-ten two  
 '(The ceiling) was made to reach the kitchen, **that** iron, **that** was stretched by them to reach the kitchen, that, of the size twelve. (*Memperbaiki Rumah*)'

### 2.3.4 ‘Uniquely Identifiable’ と ‘Referential’ を表す形式

Bantik 語には ‘Uniquely Identifiable’ のみを表す形式は存在しないが、‘Referential’ を表す形式は存在する。これらは ‘uniquely identifiable’ であることも示すことがある。本論では Hedberg 2013 にあるように、givenness hierarchy の一番下のカテゴリーにあるものとして記述しているが、Bantik 語においては、言語形式についてはこの二つの違いは見受けられない。両者を表す形式としては本論で特に詳しく扱う *tou* がある。この要素は元々「人間」を表す語であったと考えられるが（以下の 3.1 節を参照）、現在の Bantik 語においては名詞、固有名詞、形容詞、動詞のいずれかに先行して「～（する）もの」という、なにかの事物を現す。本論では *tou* は被修飾要素あるいは先行詞として機能する代名詞と考え、PRO とグロスを付けている。

そして、‘uniquely identifiable’ か、‘referential’ を示す。言い換えると、*tou* が付加した要素は、その要素が発話された時点で指し示すものが何であるか特定しうる (uniquely identifiable)、あるいは後続の文脈で継続して出現することによって特定しうる (referential)。同様の機能を果たすと考えられるのは「初めて文脈に登場することを示す (mirative)」の代名詞の *ite* 「近称」、*ete* 「遠称」がある。ここでは簡潔にそれぞれの用法を紹介するが、*tou* については後続のセクションで詳しく記述する。

次の例 (10) の最後の行の *tou gagudaj* 「大人のものたち<sup>12)</sup>」は 最初の行に出てくる *kakanio? bo bagai* 「小さい(猿)と大きい(猿)」のうち、大きい(猿)の中の成員を指すことがわかるので、‘uniquely identifiable’ と考えられる。

- (10) *yo side kasi? na-h-a-himuy=te kakanio? bo bagai e*  
 then I.3pl poor V.PST-RED-/a/-gather=COMP small and big DP  
*n-ako=te nan-dea? si-timpunu*  
 V.PST-go=COMP V.PST-find SI-turtle  
 ‘Then they (=all the monkeys), small and big, gathered and went for looking for the turtle.’  
*n-ako=te nan-dea? su kakayuan yo kute?*  
 V.PST-go=COMP V.PST-find LOC forest then DP  
*i-timpunu na-ka-ka-muni su aruj nu-tibe?*  
 I-turtle V.PST-RED-POT-hide LOC under LK-coconut.shell  
 ‘(They) went for looking in the forest so the turtle hid under the coconut shell.’  
*s<im>u? mai su aruj nu-tibe?*  
 <AV.PST> enter DP LOC under NU-coconut.shell  
*yo ni-ka-sepa-sepa=te mai ni-tou gagudaj*  
 then PST-RED.ITR-kick=COMP DP LK-PRO adult  
 ‘(The turtle) entered (and stayed) under the coconut shell, then kicked repeatedly by adult monkeys (*I-timpunu bo i-boheng*)’

次の例 (12) は *tou* が ‘referential’ な要素に付加している例である。例 (12) では *pun m-*

*baŋo ma-raŋkasa?* 「背の高いココナツの木」に先行し、無生の事物を示す。統語的に見ると *tou* は後続の名詞+形容詞からなる節が修飾する先行詞として機能し、*tou* 以下 *ma-raŋkasa?* までが名詞節を形成している。そして *tou* が付加していることによって、この名詞節で言及された「ココナツの木」は後続の文脈において話題となってくる可能性があることを示す。

- (12) *i-tou*      *puŋ m-baŋo*      *ma-raŋkasa?*      *apade?*=*ku*  
 I-PRO      tree LK-coconut      ADJVZ-tall      belong=NI-1sg  
 ‘The tall coconut tree belongs to me’ (Elicitation session)

代名詞のうち、文脈において初出のものを指し示す (mirative) 代名詞 *ite* は以下の例 (13) の最初の行に現れている。通常、このように *ite* で指示された事物 (例 (16) においては *polpen* 「ボールペン」) が次の文では *ene* 「指示代名詞、中称」で指示され、述べられている。例 (14) の最初の文に出てくる *ete* は場所を示しているが、その場所は後続の文では *sene* 「場所を示す指示代名詞、中称」で置き換えられ、言及されている。これらの例にあるように、*ite* および *ete* は初出の事物に関して一度きりで用いられるもので、再度同一の事物が言及される場合は他の指示代名詞などで置き換えられなければならない。

- (13) *ite*      *polpoin*      *baras-en=nu.*  
 that      ballpoint.pen      lend-AN=NI.2sg  
 “That is the ballpoint pen that you will lend (me)”  
*ene adiei*      *pa-ka-tahaŋ-en*      *bo*      *pa-ŋwe.*  
 that do.not      APP-POT-long-GV and      PA-return  
 “That (one), do not (borrow) for long and return (it immediately).” (Elicitation session)

- (14) *i-ama?*=*ku*      *pai*      *ete.*  
 I-father=NI.1sg      exist      there  
 “My father is there.”  
*ka-bua=ku*      *isie*      *h-um-ompoŋ*      *su*      *sene.*  
 POT-see=NI.1sg      I.3sg      UM-sit      LOC there.medial  
 “I can see he sits there.” (Elicitation session)

### 2.3.5 Type Identifiable

Bantik 語において ‘type identifiable’ な名詞は、例 (15) の *saŋkoi* 「畑」や *sapi* 「牛」のように何もつかない形で現れる。

- (15) *ia?*      *kokonio?*=*ken.*  
 I.1sg      small=CONT  
 ‘I was a small (child).’



$\emptyset$ <i>t-im-uhu?</i>	<i>sitete?</i> = <i>ku</i>	<i>n-ako</i>	<i>ŋ-saŋkoi</i> ,
-AV.PST-follow	I-grandfather=NL.lsg	AV.PST-go	LK-field
$\emptyset$ <i>n-ako</i>	<i>na-meho</i>	<i>sapi</i> .	
AV.PST-go	AV.PST-depart	cow	

'I followed my grandfather to the field, (I went there) to pasture cows.' (*Luka*)

### 3. 'Referential' であることを表す *Tou* の用法

本節では *tou* がどのような要素であるかを記述する。3.1 では *tou* の用法を概説する。3.2 では *tou* が情報構造の観点からどのような働きをするかを詳述する。

#### 3.1 *Tou* の語源と統語的特徴

Bantik 語において、「人間」を意味するのは *toumata* である。これは、*tou* と *mata* 「目」が合わさってできたものであると考えられる。北スラウェシ州の他の言語において「人間」は *tou* に近い音を持つものが多い<sup>13)</sup>。Bantik 語には助数詞が存在するが、そのうち人間を数えるときに使用するものは *katau* である。このうち *ka* は数詞を形成するときによく出てくる形態素であり、*tau* は *tou* と同根であると考えられる。Bantik 語が属するサギル諸語の祖語は \**tau* と再建されている (Sneddon 1984) ので、助数詞の方が元の形を保持している。その後、母音 /a/ が /o/ に変化して、*tou* となり、本論で扱う代名詞の *tou* や「人間」を表す *toumata* の *tou* の部分になったのだろう。

本論で扱う *tou* も「人間」を表す \**tau* から派生し、*toumata* の *tou* や *katau* の *tau* と同根のものであると推測できる。そのため *tou* が付加して形成される名詞節は人間を表すことが多いのだと考えられる。

Bantik 語においては「人間」を表す名詞句かそれ以外を表す名詞句かで異なる振る舞いをする。例えば、主格を表す *i-/ŋ*、属格および Undergoer Voice の主体を表す *ni-/nu-*、目的格を表す *si-/su-* の三種類の名詞マーカが存在する。このとき、各マーカのうち、左側に書かれたものは「単数の人間」を表す名詞句に付加し<sup>14)</sup>、右側に書かれたものは「複数の人間」もしくは「非人間」を表す名詞句に付加する。「人間」以外は単数と複数の区別がないのである。

'Referential' を表す要素について *tou* についても同様のことが言える。「非人間」を表す名詞に付加するものは、単数と複数の区別なく *tou* であるが、「人間」を表す名詞に付加する場合は単数だと *tou*、複数だと *side* となる。後者は三人称単数の代名詞と同一の形態である。

また、*tou* が付加して形成された名詞句（あるいは名詞節のこともある）は、「人間」も「非人間」（の「動物」や無生の「もの」）も指し示すことができる。しかし、*tou* が先行する語の品詞は、指し示すものが「人間」かどうかで異なってくる。*tou* が名詞の前に置かれる場合は、形成された名詞句は「人間」を表すものに限られる。「人間」に加えて「非人間」も指すことができるのは、*tou* が形容詞や動詞の前に置かれる場合のみである。後者の場合、統語的には *tou* が関係節の先行詞として機能していると分析できる。

ただし、注意すべきは *tou* が付加した名詞句・名詞節は「単数の人間」に付加する名詞マ

ーカーを取る。上述の例(12)では「非人間」のココナツの木を指している場合も「単数の人間」を表す名詞マーカの *i*- をとっている。

*tou* の品詞は、本論では代名詞としている。統語的な観点から述べると、名詞に前置したときの *tou* は名詞句の head として機能し、被修飾要素となっている。また、形容詞や動詞に前置するときは全体が名詞節になるが、*tou* はその名詞節の head として機能していると言える。

### 3.2 *Tou* が表す情報構造における名詞句のステータス

Bantik 語においては、主語は定であることを強く要求される。特に、人物を表す名詞は、不定であると主語にはなれない。言い換えると、旧情報を表す名詞句、あるいは第2節で述べた givenness hierarchy において 'in focus'、'activated'、'familiar' の三つのカテゴリーに当てはまる事物を現す名詞句が典型的には主語になるのである。

また、一番 givenness の低い 'type identifiable' に当てはまる事物を現す名詞句が主語になることは通常ない。唯一の例外は、例(16)のように総称として用いられる名詞句の場合のみである。

- (16) *manu?*    *koto?*    *ŋ-kaju*    *t <um> aca?*  
 bird        top        LK-tree    <AV.NPST>-fly  
 'Birds fly.'<sup>15)</sup> (Elicitation session)

さて、残る二つのカテゴリー、'referential'、'uniquely identifiable' に当てはまる事物を指し示す名詞句は主語になりうる。ここでは主に 'referential' のカテゴリーに当てはまる事物を扱うが、既に第2.3.4で述べたように、この二つのカテゴリーの区別は Bantik 語においてはあまり意味をなさない。これらのカテゴリーに当てはまる事物を指す名詞句は、mirative の *ite*、*ete* あるいは *tou* を伴って現れる。通常 *ite*、*ete* で指示された事物は非言語的文脈において顕著であり、特定できるものであるが、*tou* が付加して形成された名詞句は、文中に現れた時点ではまだ聞き手が特定できる事物を指示こともあるし(以下の例(37)を参照)、特定できない事物を指示することもある。ただし、後続の文脈においては特定されたものとして言及されうる。以下の節3.3では、*tou* が付加して形成された各種の名詞句を概観し、その振る舞いを検証する。

### 3.3 *Tou* が付加した名詞句

この節では、*tou* が様々な品詞に付加した文例を挙げる。

まず、*tou* が、「*tou*+形容詞」あるいは「*tou*+動詞(句)」の構造をとり、全体で名詞としての機能を持つ名詞節を形成することがある。このとき、*tou* が付加して形成された名詞句は人物、動物、事物など、すべてのものを指すことができる。また、*tou* が表すことで、まだ文脈に登場していないものであっても主語として現れることができる。2.3.4節で述べたように、*tou* が付加した名詞句・名詞節は「単数の人間」に付加する名詞マーカを取る。

次の例(17)は *tou* を先行詞として後続する動詞句 *ma-turau su-barei=ne* 「彼・彼女の家

に住む」が置かれ、*i-tou ma-tucau su barei=ne* 全体が名詞節となって、文の主語として機能している文である。例 (18) では *tou* の後に形容詞 *ma-husu?* 「やせた」、その後に表示代名詞 *e?e* が置かれ、*i-tou ma-husu? e?e* 全体が主語として機能している。

- (17) *i-tou ma-tucau su barei=ne i-tuadi=ku*  
 I-PRO AV.NPST-live SU house=NI-3sg I-younger.sibling=NI.1sg  
 ‘That one who lives in his/her house is my younger sister/brother’ (Elicitation session)
- (18) *i-tou ma-husu? e?e taguan nu-barei*  
 I-PRO ADJVZ.NPST-skinny that owner LK-house  
 ‘That skinny one is the owner of the house.’ (Elicitation session)

また、*tou* が人でなく、物を指し示すこともある。以下の例 (19) と (20) は、それぞれ主語として機能する名詞句が *tou* に後続し、名詞句を形成している文である。例 (19) では *tou ma-baha?* 「重いもの」が無生物、例 (20) では *i-tou pun m-ba?o ma-ra?kasa?* 「背の高いココナツの木」が植物を表している。例 (21) では、*i-tou ma-itu?* 「黒いもの」が黒い犬を表している。

- (19) *pai sene i-tou ma-baha?*  
 exist there I-PRO ADJVZ-heavy  
 ‘There is a heavy one’ (Elicitation session)
- (20) *i-tou pun m-ba?o ma-ra?kasa? apade?=ku*  
 I-PRO tree LK-coconut ADJVZ-tall belong=NI.1sg  
 ‘The tall coconut tree belongs to me.’ (Elicitation session)
- (21) *i-tou ma-itu? ene kapuna=ku*  
 I-PRO ADJVZ-black that dog=NI.1sg  
 ‘That black one is my dog.’ (Elicitation session)

以上まとめると、*tou* は、形容詞あるいは動詞が後続する場合は、*tou* と後続の要素が名詞節を形成し、‘referential’あるいは‘uniquely identifiable’という情報ステータスを持つ事物を現す。

次の例 (22) と (23) は、*tou* が名詞の前に置かれて名詞句を形成している例である。(22) では属格あるいは Undergoer Voice の行為者を表す名詞マーカ―の *ni-* (linker としても機能するため LK とグロスしている) と *si-* (目的格を表す) が付加した例である。両例とも *tou* が名詞句の前に置かれて全体で名詞句を成す<sup>16)</sup>。*tou* に後続する要素はどちらも「人間」を表す名詞句である。

- (22) *barei ni-tou metehe? pai su sene*  
 house LK-PRO teacher exist LOC there  
 ‘The teacher’s house is there.’ (Elicitation session)
- (23) *ia? s-im-erei si-tou ma-n-a-nekoso? ene*  
 I.1sg <AV.NPST>-see I-PRO AV.NPST-RED-/a/-steal that  
 ‘I saw that thief.’ (Elicitation session)

第3.1節で述べたように、*tou*に後続する名詞句が複数の「人間」を表すときは、*tou*の代わりに *side* を使用する必要がある。例(24)は例(23)と類似の文で、*ma-n-a-nekoso?*「泥棒」が複数であることを示すため、*tou*ではなく *side* が用いられている。例(25)も複数の‘referential’な「人間」を表す名詞句に *side* が付加されている例である。

- (24) *i-yopi na-moaga? si-side ma-na-nekoso?*  
 I-Yopi NAN-beat SI-PRO MA-RED-steal  
 ‘Yopi beat thieves.’ (Elicitation session)
- (25) *side mahuanei mam-bere su saykoi*  
 I.3sg male AV.NPST-work LOC field  
 ‘Men works at the field’ (Elicitation session)

*tou* が付加する名詞句には、固有名詞も含まれる。以下の例(26)では固有名詞の *Bas* (個人名) に *tou* が付加している。(下記の例の T: は話者の別を表している。)

- (26) T: *uri? ni-tou Bas yo o*  
 say LK-PRO Bas then oh  
 ‘The man called Bas said so, didn’t he?’ (*Memperbaiki Rumah*)

### 3.4 定・不定・特定と givenness の関係と *Tou* の機能

‘Definite’「定」と‘indefinite’「不定」の区別は、語用論においてよくみられる。本論では「定」とは、特定のもので同定できるもので、典型的にはすでに文脈に出てきているか、言語外の文脈において顕著なものと考える。そして「不定」はそれ以外としておく (cf. Lyons 1999)。「定」「不定」の区別と givenness hierarchy との関係をここで整理し、*tou* がその関連においてどのような機能を果たしているかを論じる。

第2.3.4節では、*tou*には、それが付加した名詞句・名詞節が‘referential’あるいは‘uniquely identifiable’という givenness のカテゴリーにある事物を指すことを示すという機能があると述べた。

Bantik 語は定の名詞句しか主語にならない。「定」の名詞句を givenness hierarchy に置き換えると、givenness の高い‘in focus’‘activated’あるいは‘familiar’のカテゴリーに当てはまるものが「定」の名詞句であると考えられる。第2節で述べたように‘in focus’の事物を指す名詞句は、ゼロ代名詞か代名詞の接続形であることが多く、‘activated’の事物を指す名

詞句名詞句に *ie* (近称の指示代名詞) *e?e* (遠称の指示代名詞) が付加した形、あるいは *ie*、*e?e* のみであることが多い<sup>17)</sup>。中称の指示代名詞の *ene* は 'familiar' のカテゴリーに属する指示物を表す名詞句に付加する、あるいは単独で用いられて 'familiar' な事物を指示する。代名詞の独立形も 'familiar' な事物を指示することが多い。

反対に givenness hierarchy のうち、'type identifiable' のカテゴリーに当てはまる事物を指示する名詞句 Bantik 語においては「不定」になると考えられる。

従って、次の例 (27)、は適格な文であるが、(28) のように裸の名詞句、つまり givenness の観点からは 'type indentifiable' のカテゴリーに属する事物を指示する名詞句が主語になっている文は不適格である。

- (27) *babinei ene mahara? oto? su sene*  
 female that AV.NPST-wait car LOC there  
 'That woman is waiting for the car there.' (Elicitation session)
- (28) \**babinei mahara? oto? su sene*  
 female AV.NPST-wait car LOC there

さて、'uniquely identifiable' や 'referential' な事物を現す名詞句は「定」なのか「不定」なのか。実際に 'referential' のカテゴリーに属する事物を指示する mirative の *ite*、*ete* (mirative の指示代名詞、2.3.4 節参照) も、*tu* が付加した名詞句も主語になることができる (例 (12) から (14) 参照)。また、*ite*、*ete*、*tu* が付加した名詞句が指し示す事物は同定できるものである。言語的先行文脈には登場していない事物を指し示すこともあるが、すでに登場した事物を指す示すこともある。ただし、*ite*、*ete* は先行文脈に存在していなくても、言語外の文脈においては顕著なものを指示している。以上を勘案すると、Bantik 語において 'uniquely identifiable'、'referential' な事物を指示する名詞句は、少なくとも「特定」であり、「定」の範囲にあると言える。

実は *tu* が付加する名詞句にさらに指示代名詞 *ene* が付加することがある。次の例 (29) (例 (23) の再掲) でも *tu*+*ma-n-a-nekoso?* 「泥棒」+*ene* の形が現れている。これは、*tu* により「初めて文脈に出てきた事物」を指していること、その後の文脈において再度言及されることを示している。そして *ene* により、この事物が 'familiar' 以上であること、つまり話者と聞き手双方が特定できる人物か、あるいは非言語的文脈において顕著であることを示している (ここでは動詞が過去形であるので、双方が特定できる人物であることを示していると考えられる)。これに対して、*itou* が付加しておらず、*ene* のみが付加している例 (30) は双方が特定できる人物であるか、すでに文脈に出てきたことだけを示しており、その後の文脈において再度言及されるかどうかは示されない。通常理解では、例 (30) における *ma-n-a-nekoso? ene* は、何回か見たことのある泥棒、あるいは見たときに既に噂になっていたりして知っていた泥棒であることを示す。

- (29) *ia? s-im-erei si-tou ma-n-a-nekoso? ene*  
 I.1sg <AV.PST>-see I-PRO AV.NPST-RED-/a/-steal that

- 'I saw that thief.' (Elicitation session)
- (30) *ia?*            *s-im-erei*            *ma-n-a-nekoso?*            *ene*  
 I.1sg            <AV.PST>-see    AV.NPST-RED-/a/-steal    that  
 'I saw that thief.' (Elicitation session)

以上のように、*itou* の機能は後続する文脈で再度言及されるかどうかを示すのだと考えられる。これは mirative の指示代名詞、*ite* と *ete* についても同様である。これらの機能は 'referential' のカテゴリーに当てはまる事物を指示するために必要なものである (Hedberg 2013 の coding protocol、本論脚注 10 を参照)。

### 3.5 文脈の中の *tou*

これまで *tou* が付加した名詞句は、後続する文脈において再度言及される名詞句であると述べてきた。しかし、実際の会話では、発言しようと思っていた内容が会話の流れが変わることによって発言しないままになることもあるので、必ずしも *tou* が付加した名詞句が再び言及されるかどうかの保証はないと思われる。また、givenness hierarchy の考え方では、下の方のカテゴリーを指示する言語形式が上方のカテゴリーを指示する言語形式も兼ねるので、実際の例には 'referential' なものだけでなく、'familiar' あるいは 'activated' と考えられるものも指示することがある。順次、例を挙げて考察する。

#### 3.5.1 'Referential' な事物を指示する *tou*

まず、独白と民話の語りのテキストにおける 'referential' なものを指す *itou* について見ていく。例 (31) は民話 *I-timpunu bo i-boheng* において、初めて *korano nu-bohej* 「猿の王」が現れたときの文である。初めて登場したここでは、*tou* は付加されていない。ところがその八つ後の文 (32) では名詞マーカー *i* が付加した *tou* によって導入されている。

- (31) *dadijihi?*=*te*            *i-korano ni-bohej*.  
 listen=COMP    I-king    LK-monkey  
 'Monkey's king listend.' (*I-timpunu bo i-boheng*: line 54)
- (32) *na-marote*            *i-tou*    *korano nu-bohej*            *kasi?*  
 AV.PST-announce=COMP    I-PRO    king    LK-monkey    INT  
*pa-dadijihi?*,            'kite?            *siyka-maya-n*            *ie*,  
 CAUS-listen    I.1pl.EXC            one-all-AN            this  
*ka-kanio?*            *bo*            *bagai.*'  
 RED-small            and            big  
 'The king of monkeys announced and let (them) listen (to him), "We are one people, including small ones and big ones."' (*I-timpunu bo i-boheng*: line 62)

例 (32) の後、民話の中で、「猿の王」は猿全体の指揮をする。実際に行動するのは手下の猿だが、要所要所で命令を下す。41 文離れて (33)、そこからさらに 34 文離れて (34) の

文が来る。(33) でも *tou* が付加されている。(34) は最後から三行目の文であり *tou* は付加されていないが、ここまでで「猿の王」の存在は顕著となっており、その後はもう言及されない。

- (33) *uri?*        *ni-tou korano n-side, 'ako dea?*    *nai?*  
 say        LK-PRO king    LK-I.3pl go        find        come  
*i-bakuru*        *e*        .  
 I-anoa                DP  
 'Monkey's king said "Go, find, bring an anoa here." (*I-timpunu bo i-boheng*: line 105)
- (34) *doŋka i-korano nu-boheŋ*        *ka*        *side dua su*  
 then    I-king    LK-monkey        because I.3pl two LOC  
*timbou=ne*        *to,*        *ka*        *side*        *ka-kani?*        *bo*  
 top=NI.3sg        DP        because I.3pl    RED-small    and  
*bagai pandihi?*=*te*        *ha*        *nu*        *ake*        *yo*  
 big        side=COMP        all        REL        water then  
*na-rimisi?*=*te*        *ha*        .  
 AV.PST- be.drowned=COMP all  
 'Then the king of monkeys, beause the two of them were at the top of the tree, the small ones and the big ones were side of the water, and then were all drowned.'  
 (*I-timpunu bo i-boheng*: line 139)

このテキストの中の *tou* が付加した名詞句 *korano nu-boheŋ* 「猿の王」は話の半ばで登場してからずっと顕著な存在であり続ける。二回目と三回目の登場の際に *tou* が付加されたのは、この存在が後続の文脈において大事であることを示す働きがあるのだろう。一回目の登場の際には *tou* が付加されていないが、調査協力者によると付加してもよいとのことだ。

次の例は独白の Waktu Kecil 「子供時代」からとったものである。「石の下に隠した葉が見つかった場合、隠した本人は今度は（同様にして隠された葉を）探す」という意味の文である。統語的には *i-tou na-muni* 「隠した人」が *isie* 「三人称単数」を先行詞とした関係し *nu* の後に現れていて、*isie* を修飾する形になっている。これ以前の文脈では「石の下に葉を隠す」という行為にしか言及はされておらず、当然「隠した人」もある程度活性化された事物であるものの、ここで初めてテキストに登場するため、*tou* が付加されていると考えられる。

- (35) *ma-hi-b-a-buni-an*                                *dauŋ*    *su*        *aruŋ*                                *nu-batu,*  
 AV.NPST-RCPL-RED-/a/-hide-AN    leaf    LOC        under                                NU-stone  
*i-sai*        *nu*        *man-dea?*                                *e.*  
 I-who        REL        maN-find                                DP  
*bo*        *ada*        *ka-dea?*=*ne*        *yo*        *isie*        *nu*

and if POT-find=NI.3sg then I.3sg REL  
*i-tou na-muni nu man-dea? ka-sau?*  
 I-PRO AV.PST-hide REL maN-find KA-one  
 '(We) hid a leaf under the stone from others, (then compete) who would find it.  
 And if it was found, the one who hid it would look for it (in turn) next time.'  
 (*Waktu Kecil*)

この後は、*tou* が付加して導入された「隠した人」を含む子供たちみんなの話が続く。例(36)は(35)の直後に続く文である。

(36) *ijene ada ma-nayaṅ su paniki*  
 like.this if AV.NPST-play LOC Paniki.river  
*ma-ta-tumpere-an <memayaṅ> ma-pia.*  
 AV.NPST-RED-/a/-frog-AN indeed ADJVZ-good  
*ka, <selain> kite? ma-nayaṅ, kite?*  
 because except I.1pl.EXC AV.NPST-play I.1pl.EXC  
*ma-neno=te <lagi>.*  
 AV.NPST-bathe=COMP again  
 'Like this, playing in the river jumping into with others was good (thing) indeed.  
 Because in addition to playing, we bathed too.' (*Waktu Kecil*)

このように、*tou* が付加した名詞句は後続の文脈においてある程度顕著であり続ける。

### 3.5.2 'Familiar' であり、後続の文脈で言及される事物を指す *tou*

*Tou* は固有名詞の前に現れることもある。固有名詞が補足なしに突然文脈に現れる場合は話者、聞き手双方が了解している 'familiar' な事物を指す。*tou* が固有名詞に付加する場合は、それまでの文脈には現れていなかったものの、後続する文脈では重要になる事物であること、また固有名詞が用いられることから話者・聞き手双方が知っている事物であることを示す。

次の例(36)(37)は一続きの会話(例(37)は(26)を再掲したもの)だが、(36)で *Bas* という人物が初めて登場するときには *tou* が付加されている。この会話は家の増改築にかかわるもので、*Bas* は専門的な知識を持った大工であり、その指揮をとっている人物である。

(36) E: *<semen> ni-ruan-en buhu ma-puro tou man-duhaṅ=ken*  
 cement PST-buy-GV rotten one-ten but AV.NPST-increase=CONT  
*ma-puro*  
 one-ten  
 'Cement was bought ten sacks first, but then (we) added ten.' (*Memperbaiki*)



*Rumah*)

- (37) T : *uci?*    *ni-tou*    *Bas*    *yo*    *o*  
           say    LK-PRO Bas    then    INT  
           ‘The man called Bas said so, didn’t he?’ (*Memperbaiki Rumah*)

(37) の後も *Bas* の指揮によって家族が材料をそろえたり動いたりする様子が話され、話者の交替が八回起こった13文ののち例(37)の文が現れて *Bas* 自身の行動が示される。ただし、このときまで *Bas* はずっと顕著な存在であり続け、‘in focus’のステータスにあるため、ゼロ代名詞で表現されている。

- (38) T : *gare?*     $\emptyset$             *ma-ki?aŋ*            *yo*    *o*  
           only                    V.NPST-lift            then    INT  
           ‘(He) only lift (the roof), didn’t you?’ (*Memperbaiki Rumah*)

### 3.6 *Tou* の機能

以上みてきたように、*tou* が付加して導入される名詞句ないし名詞節は、*tou* と共に現れるまでの文脈には現れていない。ただし、言及される時点ではある程度推測のつく事物を指示する場合もある。*tou* が付加した名詞句ないし名詞節が指示する事物は、その後の文脈の一定のあいだ、顕著、あるいは‘activated’や‘in focus’であり続ける。

## 4. まとめ

Bantik 語にも他の多くの言語と同じように、情報構造において特定の名詞句の情報ステータスを表す形式がある。本論では Gundel et al 1993, Gundel 1999, Hedberg 2013 などで提唱されている ‘Referential givenness/newness’ を分類した六つの givenness hierarchy のカテゴリーを参照し、Bantik 語の形態を分析した。ゼロ代名詞と代名詞接続形は ‘in focus’、指示代名詞の近称 *ie* と遠称 *e?e* と代名詞独立形は ‘activated’、中称の指示代名詞 *ene* は ‘familiar’ のカテゴリーに当てはまる事物をそれぞれ支持する。Bantik 語において ‘uniquely identifiable’ と ‘referential’ に当てはまる事物を表現する形式が異なるかどうかは発見できなかった。

言語形式の中で特に ‘referential’ に当てはまる事物を指示すると考えられるのは mirative の指示代名詞 *ite* 「近称」と *ete* 「遠称」に加えて代名詞の *tou* だと考えられる。これらで指示された事物はその後の文脈の中で言及され続けることが多い。

代名詞の *tou* は Bantik 語において人間を表す *toumata* の最初の部分と同根であり、もともと「人間」を表していたと考えられる。単独で用いられることはなく、名詞句の前におかれて全体で名詞句を形成するか、head となって形容詞か動詞の前におかれて全体で名詞節形成する。*tou* が名詞の前におかれて形成された名詞句は「人間」しか指示することができない。これに対し、*tou* に形容詞や動詞が後続して形成された名詞節は「人間」も「非人間」も指示することができる。

実際の独白や会話においても *tou* は散見されるが、大抵の場合、最初に文脈に登場したときに付加される。その後は *tou* なしで同じ指示物が指示されることもあるし、*tou* が付加されて再び現れることもある。*tou* が付加した名詞句や名詞節で指示した事物は、その後の文脈において一定のあいだ顕著でありつづけることが、実際のテキストから結論される。

#### Abbreviations

1sg	first person singular
1pl.EXC	first person plural exclusive
1pl.INC	first person plural inclusive
2sg	second person singular
2pl	second person plural
3sg	third person singular
3pl	third person plural
-AN	suffix <i>-an</i> which has a function of nominalization, or of forming derivational verbs
CONT	enclitic = <i>te</i> that indicates continuative aspect
COMP	enclitic = <i>ken</i> that indicates completive aspect
DP	discourse particle
-GV	suffix attached to verb bases, which indicates goal voice
I-	nominative case marker attached to subject nominals
INT	interjection
POT-	potentive prefix <i>ka-</i> which attaches to verb bases
AV.NPST	prefix attached to verb base, indicating non-past tense and Actor Voice
AV.PST-	prefix attached to verb base, indicating past tense and Actor Voice
REL	relativiser <i>nu</i>
PRO	pronoun <i>tou</i> that forms an NP with a noun, and that functions as an antecedent
LK-	noun marker <i>ni-/nu-</i> that denotes genitive or actor in undergoer voice sentences, or linker that connects two NPs

#### References

- Bawole, George. 1993. *Sistem fokus dalam bahasa Bantik*. Dissertation submitted to Universitas Indonesia.
- Clark, Herbert and Eva Clark. 1977. *Psychology and Language: An Introduction to Psycholinguistics*. New York: Harcourt Brace Jovanovich.
- Clark, Herbert and Susan Harviland. 1977. Comprehension and Given-New Contrast. In Freedle, Roy O. (ed). *Discourse Production and Comprehension*. 1-41. Hillsdale, NJ: Laurence Erlbaum Associates.

- (Eds.), *Focus, Linguistic, Cognitive and Computational Perspectives*. pp. 293–305. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gundel, Jeanette K. 2003. Information Structure and Referential Givenness/Newness: How much Belongs in the Grammar? In Stefan Müller (Ed.): *Proceedings of the 10<sup>th</sup> International Conference on Head-Driven Phrase Structure Grammar, Michigan State University*. 122–142. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg, and Ron Zacharski. 1993. Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse. *Language* 69(2). 274–307.
- Hedberg, Nancy. 2013. Applying the Givenness Hierarchy Framework: Methodological Issues. *Proceedings for “Cross-linguistic Perspective on the Information Structure of the Austronesian Languages: The 3<sup>rd</sup> Meeting*. Tokyo: Tokyo University of Foreign Studies.
- Kripke, Saul. 1980. *Naming and Necessity*. Harvard University Press: 22.
- Krifka, Manfred. 2006. Basic Notions of Information Structure.
- Lambrecht, Knud. 1994. *Information Structure and Sentence Form*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Noorduyn, J. 1991. *A critical Survey of Studies on the Languages of Sulawesi*. Leiden: KITLV Press.
- Sneddon, James N. 1984. *Proto-Sangiric and the Sangiric languages*. [Pacific Linguistics Series B, No. 91]. Canberra: The Australian National University.

## 注

- 1) *e?e* 'that, distal' や、*ki?aq* 'lift' が声門閉鎖音が base 末以外に現れる例である。これらの他には見つからない。
- 2) Reduplication が表すのは、動詞に関しては「動詞の表す動作を行う主体が複数」、「反復アスペクト (iterative aspect)」、「習慣アスペクト (habitual aspect)」などであり、名詞に関しては「複数」、形容詞に関しては「形容する名詞が複数」などを表す。派生接辞としてもふるまい、名詞から形容詞を派生したり、動詞から形容詞を派生することがある。
- 3) これらの「現実世界」「可能世界」は、Kripke1980 などに見られる actual world, possible world の概念を前提として用いている。
- 4) Gundel 1999 には 'Referential givenness describes a relation between a linguistic expression and a corresponding non-linguistic (conceptual) entity in (a model of) the speaker/hearer's mind, the discourse, or some real or possible world, depending on where the referents or corresponding meanings of these linguistic expressions are assumed to reside.' と述べられている。
- 5) Gundel 1999 には 'Relational givenness - newness, by contrast, involves a partition of the semantic/conceptual representation of a sentence into two complementary parts, X and Y, where Y is what the sentence is about (the topic, theme, ground, logical/psychological subject) and X is what is predicated about Y (the comment, rheme, focus, logical/psychological predicate).' と示されている。
- 6) Gundel 2003 における定義は以下の通りである。'An 'In focus' NP can be thought of procedurally as processing an instruction to 'associate representation that your attention is currently focused on'. Hedberg 2013 においては 'Typically, an 'in focus' NP refer to the referent expressed in the main clause subject or syntactic topic of the immediately preceding sentence or clause' と述べられている。
- 7) Hedberg 2013 において 'Activated' について以下のように述べられている。An NP which denotes 'activated' referent instructs the addressee to 'associate a representation from working memory' with it. The

Coding Protocol gives three conditions which a referent can be coded as 'activated': (i) 'It is part of the interpretation of one of the immediately preceding two sentences.' (ii) 'It is something in the immediate spatio-temporal context that is activated by means of a simultaneous gesture or eye gaze.' (iii) 'It is a proposition, fact, or speech act associated with the eventuality (event or state) denoted by the immediately preceding sentence (s).'

- 8) Hedberg 2013によると、'familiar'のCoding Protocolは以下の二つの条件を満たすものである。(i) 'It was mentioned at any time previously in the discourse'; and (ii) 'it can be assumed to be known to be known to the hearer through cultural/encyclopedic knowledge of shared personal experience with the speaker.'
- 9) Hedberg 2013によると'Uniquely identifiable'は以下の二つの条件を満たすものである。(i) 'The referent form contains adequate descriptive/conceptual content to create a unique referent', and (ii) 'a unique referent can be created in a 'bridging inference' by associating with an already activated referent.'
- 10) Hedberg 2013によると'Referential'は以下の二つのうち一つを満たすものである。(i) 'It is mentioned subsequently in the discourse', and (ii) 'it is evident from the context that the speaker intends to refer to some specific entity'.
- 11) Hedberg 2013では'Type identifiable'は'an interpretation is type identifiable if the sense of the phrase (the descriptive/conceptual content it encodes) is understandable'と定義されている。
- 12) Here, adult ones, small ones, and big ones denotes 'monkeys' which show up in the folk tale '*I-timpunu bo i-boheng* (The turtle and the monkey)'.
- 13) 北スラウェシ州にはサギル諸語が四つとミナハサ諸語が五つ話されているが、これらはいずれもフィリピン諸語に属する近い系統関係にある言語群である。ミナハサ諸語のうちTondano語では*tou*, Tonsawang語だと*totumu*である。Bantik語が属するサギル諸語の祖語は\**tau*と再建されている。Sangir語では*tau*, Ratahan語では*tou*、フィリピンのミンダナオ島で話されているサギル諸語の一つSangil語では*taw*である。また、これらの言語が属するフィリピン諸語の祖語では\**tawu*と再建されている。従って*tou*に類似の形はフィリピンにも大変多くみられる。
- 14) ただし、単数の人間を表している場合でも*gagudaj*「親、年老いた人」、*ana?*「子」、*puyuw*「孫」の三つの語に関しては複数扱いになり、名詞マーカ―はそれぞれ、 $\emptyset$ 、*nu-*、*su-*が付加する。(そのほかの親族名称、父、母、兄弟姉妹を表す語は、単数の人間を表す場合は単数のマーカ―が付加する。)
- 15) Bantik語において、*manu?*のみでは「にわとり」を表す。*manu? ŋ-koto? ŋ-kaju*、直訳すると「木の頂上のとり」は「にわとり」以外の羽を持つ鳥、という意味で使用される。
- 16) 例(23)の*ma-n-a-nekoso?*「泥棒」は元々動詞のbaseである*tekoso?*に動詞を形成する接頭辞*maN-*が付加し、reduplicationを起こすことによって形成された派生名詞である。
- 17) ここで「～であることが多い」と述べたのは、givenness hierarchyの下方のカテゴリーを指示する表現形式は情報のカテゴリーを指示する表現形式としても用いることができるからである。例えば代名詞独立形は'familiar'より上のカテゴリー、つまり'in focus'に属する事物を指示するために使用することができる。その反対はありえない(Gundel 1999, Hedberg 2013)。